

拝読文(『真宗聖典』72～73頁)

この時に当たりて悔ゆともまた何ぞ及ばん。天道自然にして蹉跌を得ず。かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり。その中に展転して世世累劫に出ずる期あることなし。解脱を得難し。痛み言うべからず。これを四つの大悪、四つの痛、四つの焼とす。勤苦かくのごとし。たとえば大火の、人の身を焚焼するがごとし。人、能く中にして心一つにし意を制し、身を端しくし行を正しくして、独りもろもろの善を作りて衆悪を為らざれば、身独り度脱して、その福德、度世・上天・泥洹の道を獲。これを四つの大善とするなり。」

仏の言わく、「その五つの悪というは、世間の人民、徒倚懈惰にして肯て善を作らず。身を治め業を修して、家室・眷属、飢寒困苦す。父母教誨して、目を瞋らし膺を怒らして言令和かならずして、違戾反逆す。たとえば怨家のごとき、子なきには如かず。取与節なくしてすべて共に患え厭う。恩を負き義に違して、報償の心あることなし。貧窮困乏にしてまた得ること能わず。辜較縦奪して放恣遊散す。串数して唐らに得て、もって自ら賑給す。酒に耽り美きに嗜みて、飲食度なし。心を肆に蕩逸して魯扈抵突たり。人の情を識らず。強いて抑制せんと欲う。人の善あるを見て憎嫉してこれを悪む。

「この時に当たりて悔ゆともまた何ぞ及ばん」というところですが、特にこういう五悪段のような悪業を犯してしまったことに対する果報のようなものが与えられてくると、特に命が終わるような時に深く後悔の念が起るが、後悔してみてもそれは間に合わないということです。

「天道自然にして蹉跌を得ず」。そういう悪業の結果として苦悩の報を受けるということは、天道に背くことになる。天の道——これは中国思想の上では「天」とか「天命」といわれて、何か人格的な神に相当する存在がはるか上からその人生態度や行為を見ていると教えられます。天の意^{こころ}に背いているとき、天罰が当たる。ただ、親鸞聖人が「自然法爾」という言葉で御示しのように、仏道は人間がひとりだけでそうなっていくような道として教えられている。川が上から下に流れるように、人間がその真理に随うことにおいて無理なく自然にかなって生きていける。人間というものは、どういうふうにしてみても我というものが自然法爾の在り方に背くようなことを起こして来ます。だから天道と言う時には、広く人間の当然そうあるべき在り方と、それに背くような業が起こって来た場合の在り方というものを包んで、天道ということが表現されているように思います。

「天道自然にして蹉跌を得ず」。辞書などで「蹉跌」というのは行き詰まることと定義されています。自由奔放に生きて来て悪業を犯して来てしまった結果として、どうしても行き詰まる。自我が強く、自分の命の意味というようなことも自分ではよく分らないままにいる人間は、そこに命をかけて生きて来たという場合でも行き詰まらざるを得ない。

「かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり」。「三塗」は流転輪廻における地獄・餓鬼・畜生という在り方です。これを「三悪道」とも言う。特に地獄というものは、これでもかと色々な苦悩が次から次へと襲ってくるように表現されています。その苦悩の結果、命がなくなってしまうような場合に、鬼が「活」と言っ^て命を復活させて、またその苦悩を味わわせるとい^う。

「その中に展転して世世累劫に出ずる期あることなし」。「展転」というのも、一つの苦悩が持続すると言うのではなくて、苦悩の在り方が展開してそして転じていく。そして、流転輪廻の人生観を教えて、命が状況の中に与えられる。その状況存在としての生命存在が次から次に違う命を得ていって、違う命がすべて苦悩の命であるというわけです。それが「世世累劫」——劫を重ねる——という意味です。「劫」というもの自体が無限の時間という意味を持っているのですけれども、にもかかわらずそれがまた累劫——劫を重ねるといっている。そして「出ずる期あることなし」の期^きという字は、人生の「最期」という時に使います。だから、累劫にまた苦悩の命が経巡ってくるので、その期を出ることがないということです。

この「無有出（離）期」という字は、善導大師の三心深心の釈に、二種深信と言われる自覚内容があるところにも関わります。そこには「機の深信」と言われる人間の仏道に触れて行こうとする人間の自分自身の自覚内容として、「決定して深く「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず」と言われる。つまり出たり離れたりする縁には出会えない。こういう自覚が罪悪の業を生きている自分の自覚について回る。この無有出期というのは、そういう出ることのできない苦悩の身ということを教えているわけです。

そして「**解脱を得難し**」と。仏教の解脱というのは煩惱からの解脱とまずは定義されるのですが、ここにある解脱が難しいというのは、苦悩の命から出ることができず、そこから解放されたり脱出したりできないという意味だと思ふのです。その解脱を得ることが難しく、本当に苦悩の結果を引き受けざるを得ないと結んできて、「**痛み言うべからず**」と。「痛」というのは、苦悩が人間存在を痛めつけるので、いわばこの痛みは存在の痛みと言いますか、更に言うなら生命の痛みと言ってもいい。この五悪段で言ってくるような痛みというのは、そういう離れることのできない悪業の結果を—更には果てしない苦悩の流転における痛みを、こういう言葉で表現しようとする。

「**これを四つの大悪**」となすと。三番目の悪も自覚がないというようなことがありましたけれど、この四番目の悪も、どのような悪業をやっても一向にそれが悪いと気がつかない、しかしその結果は天が見ておられるというものです。人間が、自分自身が自分で反省したりするということで痛みが出て来るのではなくて、天道に背いているということが、天のはたらきでひとりでにそういう存在を生きてきた人間に痛みを与える。そういうことを人間は知る術もない。けれども天が知っている。

「**四つの痛、四つの焼とす**」。この「焼」というのは、悪を犯した痛みを火傷のようなものと捉えて、五悪段を通して表現されるわけです。そして「**勤苦かくのごとし**」と。この「勤苦」というのは、苦悩が生命そのものとなるということとして教えられている。これが「**たとえば大火の、人の身を焚焼するがごとし**」と。大火というと、街じゅうが焼けて逃げ惑っても結局逃げるができないような、周りが全部火に包まれるような在り方を語っているのです。大火が人の身を—仏教用語では人身にんしんと読みますが—ここでは、焚焼ぼんしょう人身にんじんとあります。人の身を、ちょうど焼き鳥とか焼き豚のように火で人間を焼き上げるイメージですね。焚焼するようなことが、天道自然のはたらきとして起こるのだということなのです。

「**人、能く中にして心を一つにし意を制し、身を端しくし行を正しく**」する。こういう悪業が取りまいてる五濁悪世の中にあつて、心を一つにして意を制すると。こういう形で仏道に出遇って仏道によって人生が変わっていくことを象徴してくるわけです。身を端しくし行を正しくする。そして、悪業が取りまいてる中であつて立ち止まって、悪に染まっていかに善を作るとということが起こると。

「**独りもろもろの善を作りて衆悪を為らざれば**」、そういうずっと説いてきたような悪業を為さなければ、そこに周りがたとえどの様に悪業であっても、そこに正行—正しい生き方をしたいという意欲にたつて、正しく生きることができると、「**身独り度脱して**」、独立者として「**福德、度世・上天・泥洹の道を獲**」。これも繰り返して言われていた言葉ですね。善を為したことによって得る福と徳—何か存在に与えられる善の結果がもよおして来る幸福感のことを言っているわけです。「度世・上天」、ここでは中国の人が聞いてくれるような方向性として、「天」などに関する中国の価値観に沿って、ここでは「度世」のあとに「上天」という言葉が入っている。この「上天」は五悪段に通じて言われます。五悪段の説き方は、本当に気がつかないような悪業を犯して、地獄に墮ちるような苦悩があるのだけれども、しかし善を為せば天に昇るといふ。だからこそ、天にも昇るような喜びということが、この世の価値観として説得力を持つ。世を渡っていくことができるし、上天もできると言っておいて、最後に仏法の功德として泥洹ないおんを言います。ニルバーナ (nirvana) の音訳としては、泥洹とも涅槃とも漢字が当らされている。その涅槃を得るといふ功德を最後に置いてくる。—という形で呼びかけます。

「**これを四つの大善とするなり**」。一善、二善、三善、四善と福德は度世・上天・泥洹という形で教えられてくるのに対応して、悪業が一悪、二悪、三悪、四悪と教えられて来だけれども、それに反する善ということは同じ内容なのです。そういうことが泥洹という言葉でずっと貫かれている。そして四つの善というものを述べ終わって、そこから「**仏の言わく**」と転じて第五番目の悪に入っていきます。

「**その五つの悪というは、世間の人民、徒倚懈惰にして肯て善を作らず**」。「徒倚」というのは恣にするという意味も辞書にはみえますが、ここでは人間がひとつの道をまっすぐ行けずにさまよいうろろと道を外れてしまう、そういう

ことが起こる様が「徙倚」だと語っております。「懈惰」は、怠慢で何事に対してもおろそかにして逃げ腰であるというような生き様です。世間を生きる人々は、何かぶらぶらと生きてしまっ善を為そうとしないという。「いや、そんなことはない。俺は真面目にまっすぐにやっている」と言う方があるかも知れませんが、それは無理して生命の天道に随っていないで、どこかで無理して我の強さを矯めているというような在り方ですね。だからここに教えられているのは、「身を治め業を修して、家室・眷属、飢寒困苦す」。この世の中で自分自身の身を保って、そして生活に与えられてくる人間の生活の修業というのは、生活の中に与えられてくる仕事です。昔は田んぼを耕すお百姓さんだったり、家を作る大工さんであったり、それぞれの仕事が各々に与えられる。そうすると、その道をそれなりに工夫したり考えたりして修めていくことを、修業と言います。修業と読めば仏教の修行ではないのだけれども、この世での生活の中で自分の方向性をしっかりと見定めていくという意味で、修業と読まれる。「家室」というのは家族、「眷属」は親戚関係も含めた概念です。こういうものが飢えや寒さに困苦するような結果になってしまうのだという。

「父母教誨して」、父や母が教える。この言偏の毎という字は教えという意味になります。だから教も誨も教えなのです。父母が教えると「目を瞋らし鷹を怒らして」、つまり教えられると「自分は真面目にやっているのだ」「何を言うか」というわけで、腹立ちが目に現れる。そうして「言令和かならず」、言葉で「こうしろああしろ」と言い命じるのだけれど、やわからでない。そうして「違戾反逆す」。つまり違はたがうという字ですし、戾はもどるということですから、心が入れ違って反逆する。そうすると「たとえば怨家のごとき、子なきには如かず」と。この怨家という問題は、個人の恨みだけではない、個人の恨みと絡んだ家の恨みというようなものは、シェークスピアの『ロミオとジュリエット』という悲劇などにもみられますね。そういう場合には、跡継ぎの子供が絶えてそこで終わりにした方がよいのではないかというところまでここで言ってくるわけです。

「取与節なくしてすべて共に患え厭う」。取ったり与えたりということに節がない。「節」というのは「節度」「節制」のようにしきたりとか決まりとか礼儀とかいうものを指していて、それが欠けていることをいうのだと思います。先ほどの「徙倚」——だらしがないことを、「無節」という言葉で教えているようです。そして「衆」という字を「すべて」と読んで、することなすことをお互いに「患厭」する。この「患」という字は延書きで「うれえ」と読んでいますが、ここは「うれう」ということではないように思うのです。節なくして、与えたり取ったりすることによってお互いに患いが起こるし、厭わしくなるという、こういう関係のことでしょう。

そして「負恩違義」。儒教では「四恩」と言われて、国の恩、国王の恩、父母の恩、師長の恩という、四つの人間関係の恩を強く出すのです。そういう儒教的で封建的な恩は、ひとつ間違うと上から来て恩着せがましいものにもなる。或いは戦時中にしばしば言われた「大義」のように、体制翼賛の面が強調されることもありました。仏法で恩を言うときにはそういう方向ではなくて、教えや法の恩——つまり道理によって育てられることに対する深い感謝を言います。そして仏教で義という時は、天道や法の道理を指します。仏教のいう恩徳は、自然の道理が人間に喜びを与えることに対する恩をいうのであって、非常にふくよかな、暖かな意味を持った恩だと思ふのです。この場合は、一応中国人の生きる概念の中に浸み込んでいる「恩」や「義」という言葉を使って、そういう人間が当然守るべき在り方に背いて違ってしまうというわけですね。

そして「報償の心あることなし」と。自分の存在が拠っている恩義に応え報いようとするのがない。報償の心がなく生きてしまうと「貧窮困乏にしてまた得ること能わず」。困乏と読んでいますけれど、困難であり乏しいという。あるべき在り方に反逆して生きてしまっ、あだやうらみの心を持って生きてしまうと、生活物資が充分であってもそれを足りないとしか感じられない。そういう精神の貧しさを教えようというのが、この貧窮困乏という言葉なのではないかと思うのです。

そして「辜較縦奪」。「辜」という字は、古いという字の下に辛いという字がついている字ですね。この字は元々、昔の罪人を磔にして乾かして硬くするという意味なのだそうです。そこから転じて、取引を一手に握って、利益を独り占めにするという意味が出て来るようです。それで「辜較」という熟語は、取引をして全部自分の利益にしてしまうということのようです。「縦奪」の縦は恣にするという意味ですから、ほしいままに奪うということ。つまりすべて関係の中にあることを自分の利益として獲得してしまっ、そして奪ってきてしまっ、そうして「放恣遊散」、「放恣」で自分のものだから勝手に使って自分で自由にするというニュアンスのようですし、「遊散」は得たものが

全部どこかに出て行ってしまいう在り方ですね。だから、自分勝手に得てきたものは、自分勝手に使ってしまう全部出て行ってしまふ。

それで「**串数して唐らに得て、もって自ら賑給す**」。ここに「串」という字が出て来ました。二つの口を縦に棒が貫いているという形の漢字で、これはもちろん串^{くし}という意味ですが、もとは門から勝手に出入りするというようなことを表す形のようにです。恣に門から出入りするというニュアンスで、数は「しばしば」と読む字のようです。数^{かず}が多くなることでこうした意味を持つてくる。つまり「串数」は自由に頻繁に出入りするといった意味のようです。更に「唐」という文字がありますが、これは元々はあまり良い字ではないようです。ここでは荒唐無稽という四字熟語にあるように、唐^{いたず}らと読んでいます。そして「もって自ら賑給す」——それによって自分が賑わい給する。自分が自分の力でひとりで与えられた如くに贅沢三昧する。それは「**酒に耽り美きに嗜みて、飲食度なし**」。酒には浸るし、美味しい食べものをたしなむ。そういう満足するばかりの在り方だから、「**飲食無度**」——飲むのも食べるのも限度とか節度がない。これは現代生活を言い当てているようなものですね。まあ、罪が深いですよ。

そして「**心を肆に蕩逸して魯扈抵突たり**」。この「肆」という字にも、恣にするという意味があります。つまり心の赴くままに、飲み食いの方に心が動いてしまふ。「蕩逸」の「蕩」という字は、デレデレッと垂れ流してしまう有様を表わす字のようです。つまり「蕩逸」ということは、何か締めたりや限度がなくなってだらしがなくなるというような意味を言っているわけです。「魯扈抵突」の「魯」というのは愚かという字で、扈はしたがうという字のようです。つまり「魯扈」というのは愚かに随うということで、自分の利益を中心に生活をしていると、本当は随ってはいけない方向にまで愚かに随ってしまうということでしょう。それこそ商売相手に「それでは駄目だ」と言われたらお終いで、随うしかありませんから。でも、ヨーロッパの国々などは、外交上ではある意味でアメリカとちゃんと渡り合っていますよね。安倍さんのように何でも言うことを聞くわけではない。あれはまさに魯扈だと思のですけれどもね。更にここに「抵突」ということが出て来ます。この「抵」というのは、牛が角をもって突いていくとか、イノシシが牙をもって突っ込んでいくというようなニュアンスのようです。ちょうどスペインの闘牛にみられるように、盲目的に突っ込んでいく。そうすると、突っ込むだけ突っ込むのだけれど、一向に成果がなく何の利益も与えないことを「抵突」と言っているようです。だから愚かに随ったり抵突したりしてしまう。こういうのは、存在の道理に随うのと違って、自分勝手に、自分の思いで、自分の立場を利用したり自分の立場を利益の為にだけ使っていくような形でやってしまうということ、こういう姿で教えているわけでしょう。

そして「**人の情を識らず**」。人の心の在り方というものを知らない。人情という言葉でここでは言っていますけれども、人が情を感じないということは、ある意味で道理を感じないということと通じているところがあるように思います。「こうだったらこうなるよな」という、当然そうあるような人の心が分かっていない。

「**強いて抑制せんと欲う**」。これは先ほど言ったように、無理矢理抑えようとすることです。ただ、欲が強いとどこかで無理が生じる。そうすると、「**人の善あるを見て憎嫉してこれを悪む**」。前の段の初めの方に「**善人を憎嫉し賢明を敗壊す**」という言葉がありましたように、人が善い方向性にあることを憎むという傾向が、悪を当然のようにしている立場の人間には強くあるのではないのでしょうか。この度アフガニスタンで活動していた銃撃された医師の中村哲さんは、中東の民衆の為にあれだけ尽くしてきたのに、その国民たちの戦闘状況によって憎まれて殺されてしまった。善かれと思って幸せを願って、そしてそこに命がけで関わっている人を憎むわけですね。中村さんの善行が自分たちと異なる立場を利することになっているから、中村さんを殺してしまえということですよ。こんな理不尽とか八つ当たりとしか言えないような、善意の人を暗殺するという矛盾が、現代にもあるわけです。こういうことは、人間としてこの世を生きているところには、いつでもついている。

だけれども、本願の仏法というものは、この矛盾を生きているような罪悪深重の人間存在の只中であって、それをひっくり返すような道を与えようとするのだと教えるのです。これが五悪段に通じての人間の深い課題なのではないかというふうに思います。だから、世間を離れば良いのではない。世間の只中からこういう本当に人間の生きるべき道というものが与えられてくるのだと、五悪段を通じて教えようとしているのだらうと思います。

編集担当：飯島孝良（親鸞仏教センター嘱託研究員）